

## バウトー(Bauk Htaw)駅とチャイツ・カサン四天王寺

山形洋一

バウトーはヤンゴン中央駅から北東（反時計回り）に5つ目の駅である。1928-9年に調査された井戸水質調査地図にも記載され、由緒の正しい駅のはずだが、丘の上に最近開発された住宅地と、空芯菜の水田のあいだに、プラットフォームだけがポツンと置かれているように見える。

木造の駅舎は内回り（西側プラットフォーム）の北端の石段を上った先に、木立に隠れて立っている。このあたりは標高が低く、ちょっとした洪水でも線路付近は水没するので、駅に付属するさまざまな機器や資料などを水没から守るために、駅舎をプラットフォームから離して、小高いところに置いたのだと思われる。



図1：石段の上のバウトー駅舎

水没の危険がある低湿地に住もうというような人に、金持ちはいない。前回紹介したマルワゴンと同じく、ここでも廃品を回収・再生するインド系住民がとくに多く見られる。廃品はもっぱら手押し車と自動車で運びだされているようだが、たまに列車に持ち込まれることもある。使い古しのプラスチック袋は北西のジョゴンへ、金属や機械部品は北のタダガレーへと向かうようだ。町の皮膚の下に隠された複雑な「静脈系」の全貌は、なかなか見えてこない。

静脈の通る道筋には、動脈も流れている可能性が高い。はたして昼をすこし回った時刻になると、環状線の北西端にあるダニンゴンで買い付けられた野菜類が袋に詰められ、外回り（時計回り）列車でこの駅にも運ばれてくる。線路に落された野菜類を、待ち構えていたサイカーの車屋が拾い上げ、買い付けおばさんも乗せて、駅前の小さな公設市場を素通りして、どこかへ運んでゆく。動脈も末梢となると、やはりなかなか見えにくい。

この駅の北を走るヤダナー道路を約2キロメートル東へ行ったところに、モン族の建てた古寺チャイッ・カサンがある。入口の両脇には兄弟のバルー（食人鬼、羅刹）像が置かれ、供物段にはココナツとバナナが整然と並び、線香の煙が絶えない。

仏塔守護者として、参詣者の煩惱を破壊するのが、この悪鬼像の公式な役割だそうだが、日本の仁王やインドの寺のドワルパーラー（門衛）とは比較にならないほどの尊崇を受けているところを見れば、そんな抽象的な話ではなく、もっと具体的な現世利益が期待されているに違いない。

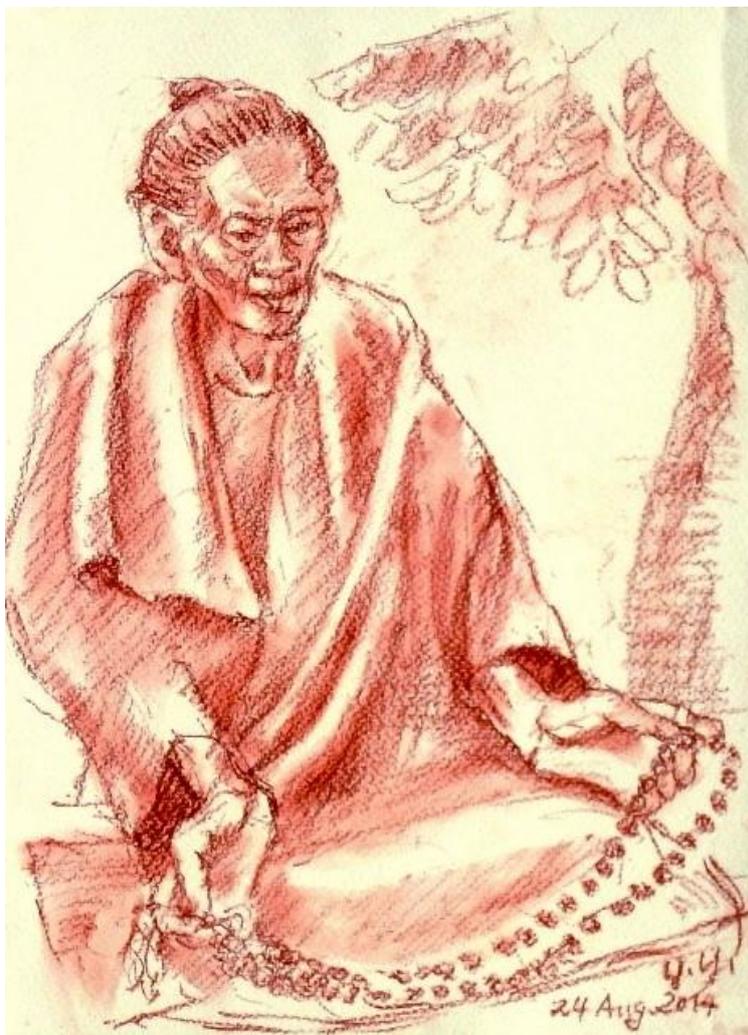


図2：チャイッ・カサンの女行者

仏塔はどこでも見かける円錐形のモン・ビルマ式だが、ここのはずんぐりとして重みがある。しかも基壇の上、鐘形の裾には、東に持国天（白）、南に増長天（緑）、西に広目天（青）、北に多聞天（ここでは「クペーラ」黄）と、立膝の四天王が四方を護っている。ミャンマーでは大乘仏教でおなじみの尊名に出会うことが珍しいだけに、ちょっと嬉しくなる。ただし奈良彫刻のように個性的な憤怒相ではなく、おつに澄ましているのが残念だ。

境内の西、ビルマガキの木の陰に、茶色の法衣をまとった行者が 10 人ほど集まっている。見るからに神々しい人もいれば、食い詰めたようなや、店舗を持たない流しの占い師のようなものもいる。

ヤンゴン市の東を流れる川、ンガモーイェイツ・クリークの右岸には、このチャイツ・カサン寺だけでなく、北にオカラパ・ミョー・ウー寺（最寄駅はカンベ）や、メラムー寺（最寄駅はタダガレー）と古寺が並んでいる。外国人はほとんど訪ねてこないが、いずれも現地で深く信仰されているらしいことは、門前の土産物店のにぎわいや、占い店の多さから推して知ることができる。市内のありきたりの観光に飽きたら、ンガモーイェイツ・クリーク沿いの、どことなく隠微な世界をさまよってみてはいかがだろうか。

（了）